

対抗と交流

江 静（浙江工商大学日本文化研究所専任講師）

1972年の国交正常化後、中日関係は様々な問題を抱えながらも、発展してきたといつてよい。その一方で、両国民のお互いの敵対心がますます強まっているのも事実である。特に今年の4月に入ると、教科書批判をはじめ、日本製品不買運動を標榜する反日デモなど、中国では、日本に対する反感が強くなっている。インターネットで日本側の反応を調べると、中国製品不買運動の呼びかけや、留学生を抑圧する悪意の書き込みなど、一夜にして平和な日本が右翼的な雰囲気呑みこまれたかのように見えた。この状況を見ると、日本文化の一研究者として、憂いを感じる。

歴史を顧みれば、中日両国間には摩擦と衝突が度々あったにもかかわらず、両国民の友好的な往来と文化交流が始終続いていた。例えば「蒙古襲来」があった元朝の時代でも、僧侶と商人が頻りに両国間を往来しており、大量の銅銭・陶磁器・書籍・香料・書画作品が日本へ続々と流入し、それと同時に、日本から木材・硫黄・工芸品などが中国に輸入されて、両国文化の発展に影響を与えた。それらの物品は当時の相互交流の歴史としていくつかの証拠を残している。京都国立博物館と東京国立博物館のサイトより、元代の作品を対象に統計をとると、京都国立博物館には計29点、東京国立博物館には計19点がある。

昨年の11月、神奈川大学COEプログラムの招きにより日本へ行く機会を与えていただいた。その機会を利用して、京都国立博物館と東京国立博物館で資料調査することができた。中国の展示品の前に立つと、私は不思議な感情が湧き上がり、胸が熱くなった。その感覚は中国で見学する時とは全く異なる感覚であった。日本での展示品は中国文化の魅力を展示するだけでなく、中国での展示よりも一層豊かな意味をもっていると感じた。即ち、それぞれの所蔵品は、数百年前に両国民が友好的に往来する歴史を如実に示しており、これらの展示品は中国文化の使者であれば、両国文化交流の結晶でもある。というのは、次の三つの理由からである。

まず、これらの所蔵品の製作者は中国人ではあるが、その伝播者、使用者、収蔵者の多くは日本人である。もし、両国民の協力がなければ、今日の私たちはどのようにこの魅力を感じ取ることができるであろうか。

次に、これらの所蔵品の多くが商品ではなくて、贈物として日本へ運ばれ、現在まで保存されているというこ

とである。これは、両国民の濃厚な友誼を示している。ここでは東京国立博物館に収蔵され、さらに国宝に指定された1点の書画作品を例として見てみよう。それは、元王朝に仕えた馮子振(1257~?)が在元の日本僧の無隠元晦(?~1358年)のために、自作の七言絶句3首を添えて贈ったものである。この他にも無隠元晦に送った言葉が伝えられており、馮がいかに無隠を重用していたかが伺われる。この国宝は、両国友好関係が深遠であったという最も有力な証明ではないだろうか。

最後に、中国人の作ったものであるが、日本に持ち込まれた後に、日本人の墨蹟も加えられた所蔵品の例を挙げよう。数百年以後の私たちから見れば、その作品は両国知識人の合作に映り、特に感慨深い作品である。例えば、東京国立博物館に葡萄垂架図という紙本墨画²がある。その作者は江南の草虫図の名手と思われる。その水墨画には、中国人の作者の傍らに、能阿弥(1397~1471年)と狩野探幽(1602~1674年)の外題が付属している。

歴史の話題を離れ、現実に戻ろう。いくら問題があっても、中国に友好的な日本人は依然として多い。今回、日本に招聘していただいた時、COEプログラム関係者の方には大変お世話になった。

私が在籍していた浙江大学日本文化研究所も、両国の理解と交流を深めようと努力しつつある機関である。研究所は1989年に浙江省初の日本研究機関として設立された。1995年には、ユネスコによって、世界の主要な日本研究機関の一つとして認められた。1998年、浙江大学日本文化研究所となり、2004年9月から浙江工商大学に日本語文化学院が創設されるとともに、浙江工商大学に移転した。現在、人員体制は専任が15名で、内訳は教授2名、助教授1名、講師6名、助手3名、事務担当3名となっている。古代中日文化交流史、近代中日文化交流史、日本語文学を3本柱として研究している。

中日関係が緊張している時期であるため、私たちの研究所にも、間接的な影響があることを憂えている。しかし、こういう時期であるからこそ、中国での日本研究をする意義があると信じ、現在の中日の文化交流を進める橋渡しの役目を果たしていきたい。

1、 2の解説は東京国立博物館のサイトによる。(江静氏は2004年11月29日~12月12日、訪問研究員として来日された。)